

昭和63年度

## 登校拒否児に対するグループアプローチに関する研究

～グループでの活動体験を通して対人関係の改善を図る～

川崎市総合教育センター教育相談Ⅰ研究会議

## 登校拒否児に対するグループアプローチに関する研究

～ グループでの活動体験を通して対人関係の改善を図る ～

教育相談 I 研究会議

鈴木眞一<sup>1</sup> 小林祐司<sup>2</sup> 本間千尋<sup>3</sup>

### 要 約

このグループアプローチは昭和61年10月からスタートし、平成元年1月20日までに7期 52回実施した。その後も継続して活動しているが、今回は、第Ⅵ期から第Ⅶ期の12回までを報告した。

当センターでは、個人セラピーの中で、治療者との関係が保たれ、ある程度心理的に安定し、自己を表現できると思われる中学生による小集団を編成し、小集団での共同の活動体験を積むことによって、学校や社会という現実場面への望ましい適応が実現できるのではないかと考えグループアプローチを試みている。

第Ⅰ期から第Ⅴ期までの活動を通して、子どもたちは徐々に心を開き、仲間を受け入れたり、仲間から受け入れられたりという体験をしながら、少しずつ自分を表現していった。

第Ⅵ期、第Ⅶ期の活動では、その基盤に立って、グループアプローチに参加している一人ひとりの子どもにとって「どのようなかわりをもつことが援助につながるのか」という視点から活動を見直してみた。

その結果、活動内容というよりは、いかにして、子どもたち一人ひとりに対して、自己表現しやすい雰囲気を作っていくか、そのための担当者の態度が最も重要ではないかということが明らかになった。

キーワード：教育相談，登校拒否，グループアプローチ，対人関係

### 目 次

はじめに

I 主題設定の理由	132	IV 経過	136
II 研究のねらい	133	V 考察	142
III 研究の内容と方法	133	おわりに	
		参考文献・指導助言者	150

<sup>1</sup>川崎市立宮前平中学校教諭（主任研修員）

<sup>2</sup>川崎市立橘小学校教諭（主任研修員第Ⅵ期）

<sup>3</sup>川崎市総合教育センター 指導主事

## はじめに

昭和61年度より第4研究室（教育相談，障害児教育）では，登校拒否児に対する教育相談活動の一つとして，個人セラピー（主として，カウンセリングや遊戯療法や箱庭療法など）に加えて，グループアプローチを試みている。

登校拒否の状態にある一人ひとりの子どもの心の成長にとって，グループアプローチがどのような意義があるのか，どのようなかかわりをもつことが援助につながるのか等について，実践を通して検討を重ねている。

このグループアプローチは，昭和63年3月までに第Ⅰ期～第Ⅴ期，合計30回実施した。この間の活動を通して，私たちは次のようなことを確かめることができた。

前回の報告では，次のような考察がなされている。

「緊張感や自己防衛が強いいためなかなか人とのかかわりをもてない子どもたちが，同じ悩みをもつ仲間集団との交流によって，自分だけではなかったという安心感が生まれ，劣等感や焦燥感が徐々に解消し，情緒的に安定していく様子が見られるようになった。

小集団という必然的に対人関係が要求される場の中で，子どもたちはこのグループアプローチで人間関係を通して，人とのかかわり方を学習しているように思える。子どもたちは相手やまわりの様子をうかがいながら，自分の感情や思いを少しずつ表出し，あるがままの自分を出しても大丈夫だったという感触をもったようだ。互いに受け入れたり，受け入れられたりという体験の積み重ねによって信頼関係が生まれ，徐々に自信を回復し，他者に対する警戒心も解消しつつあるように思われる。個人セラピーの中では体験できない小集団でのコミュニケーションは，彼らにとって久しく忘れられていた体験ではなからうか。

グループアプローチは個人セラピーの場面と現実生活場面との中間的な役割をにない，小集団での対人関係のトレーニングは，彼らが現実生活場面へとび出していくためのステップとなるのではなからうか，ということがある程度確かめられた。」<sup>1)</sup>

これまでの活動の成果を基盤にして，昭和63年5月から第Ⅵ期9回，第Ⅶ期18回実施した。今回の報告は第Ⅵ期まよび第Ⅶ期の12回目までについての研究を中心にしている。

## I 主題設定の理由

私たちは今までの臨床体験や真仁田昭他が「登校拒否児に対する治療の構造論的展開」で述べている概念をはじめ，他の相談機関の臨床報告での指摘等を通して，次のようなことを確かめることができた。<sup>2)</sup>

「幼児期より様々な問題をかかえて，思春期に入り登校拒否をする子どもや慢性的に登校拒否の

---

1) 安谷屋健他「登校拒否児に対するグループアプローチ」昭和62年度川崎市総合教育センター研究紀要，川崎市総合教育センター，1988年，179P

2) 真仁田昭他「登校拒否児に対する治療の構造論的展開」筑波大学学校教育部教育相談研究分野教育相談研究第19集 1981年 1P

状態が続いている子どもには、共通して学校での対人関係が充分にもてず、開かれた対人関係がもてないという基本的な傾向がみられる。

言いかえると、このような子どもは、自我や社会性の発達に未成熟な面があるため、人のかかわりに自信がもてず、同年齢集団の中で消極的で、他者とかかわることが不得手な子どもとも言える。また、どのような子どもにとっても、長期間家庭に閉じこもってしまうことは、社会性の発達をますます遅らせ、開かれた対人関係がもてない状態のまま、集団への不適応をますます強化していくことにもなる。」<sup>3)</sup>

そこで、私たちは同年齢の子どもたちが小集団で活動することを通して、互いにかかわり合い触れ合っていくという体験が、子どもたちの自我や社会性の発達を促し、より一層の治療効果が期待できるのではないかと考え、登校拒否児に対するグループアプローチを通して、彼らの対人関係の改善を図る試みを行った。

## II 研究のねらい

登校拒否の状態にある子どもの個人セラピーに加えて、グループアプローチでの活動体験を積み重ねていくことが、一人ひとりの子供の心の成長にとって一層の援助につながり、治療効果を高めることができると考えられる。

そこで、私たちは、第Ⅵ期、第Ⅶ期は「どのようなかかわりをもつことが援助につながるのか」という視点に立ち、具体的には以下の活動を新たに取り入れ進めることにした。

- ① 活動での子どものフォローをし、子どもの心の動きを少しでもよくとらえたいと考え、活動時間中に、一人ひとりの子どもとグループアプローチの担当者との個人面談の時間を設定した。
- ② トレーニングの要素をもつ活動内容を取り入れた。

## III 研究の内容と方法

### 1. グループアプローチの位置づけ

当センターでの登校拒否の治療過程を図-1のように示すと、グループアプローチは個人セラピーの場面と現実生活場面の中間的段階として位置づけられよう。また、場合によっては、個人セラピーによる治療の仕上げ、家庭から学校生活や社会生活へとびこんでいく橋渡しの役割が果たせるのではないかと考えられる。

つまり、子どもたちは、グループアプローチに参加することによって、他の仲間から理解され受け入れられるという体験をもち、人に対する信頼感を取りもどしたり、人のかかわりに自信がもてるようになるなどして、自らの力で現実社会へ向かっていこうという意欲が育てられていくのではないかと考えている。

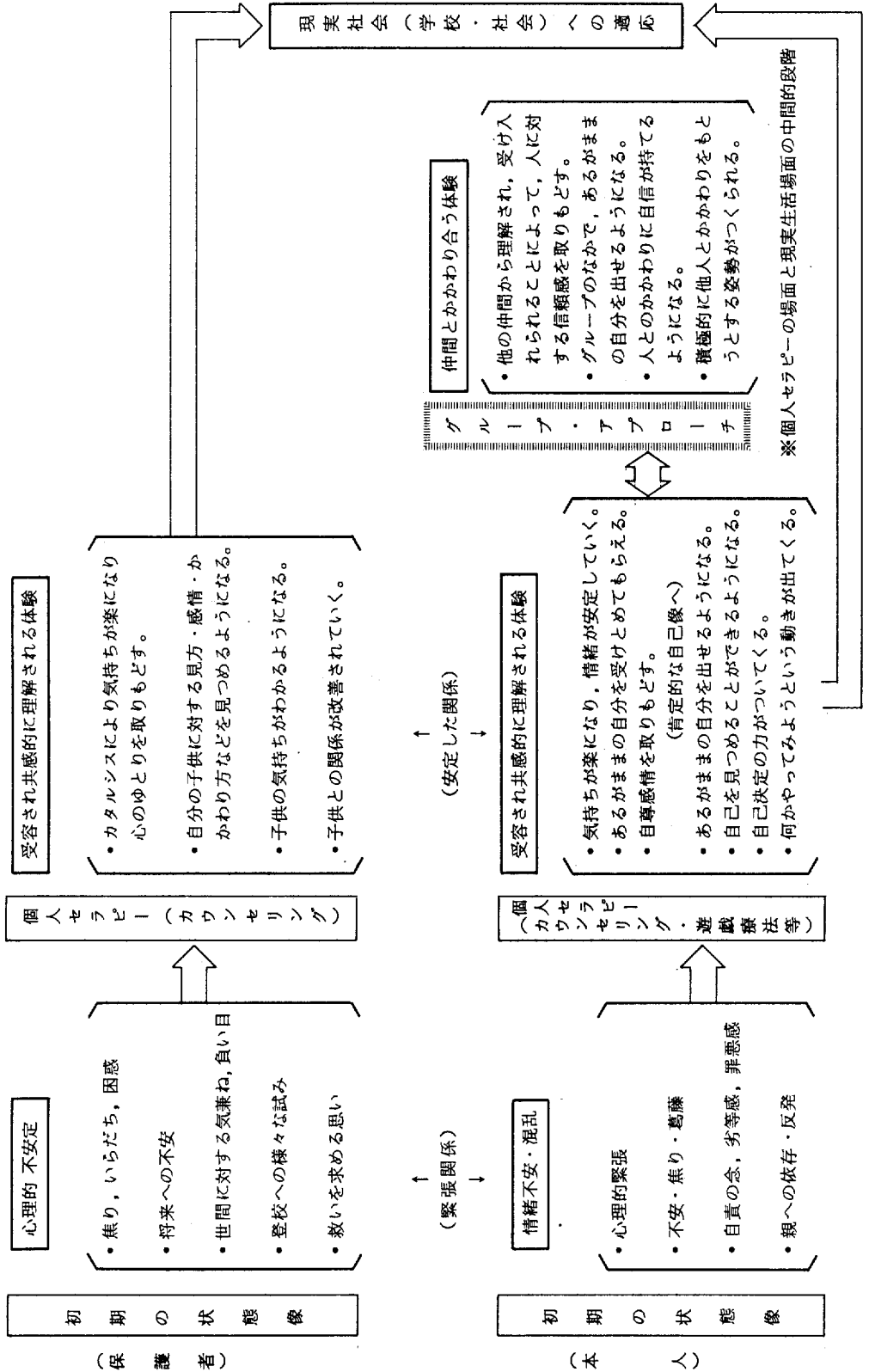
### 2. グループアプローチのねらい

個人セラピーの中で治療者との関係が保たれ、ある程度心理的に安定し、治療者に対して自己を

---

3) 安谷屋健他「登校拒否児に対するグループアプローチ」昭和62年度川崎市総合教育センター研究紀要、川崎市総合教育センター、1988年、168P

図一 登校拒否の治療過程



表現できると思われる登校拒否児を対象に小集団を編成し、小集団での共同の活動体験を通して対人関係の学習や適応の経験を積ませることによって、学校や社会という現実場面へ適応できるように援助していくことをねらいとしている。

### 3. グループアプローチの計画

#### (1) 参加者の選定条件

心因性の登校拒否児と思われる子どもで、当センターの相談室に継続して通っている中学生のうち個人セラピーを通して以下の条件が満たされ、親、子、グループアプローチそれぞれの担当者によって、グループアプローチで進展が期待できると判断された子どもを対象にする。

- ① 相談室へ相談に来る意欲があり、自分一人でも来ることができる。
- ② 子どもの相談担当者とのラポートがとれている。
- ③ ある程度心理的に安定している。(自分の気持ちをある程度言葉で表現でき、遊戯療法などの場面である程度自発的な動きがとれる)
- ④ グループアプローチに参加する意志があり、他の人とかかわり合うことが可能である。

#### (2) グループアプローチでの具体的目標

- ① 親、子どもそれぞれの相談担当者から参加者個々についての心理性格特性などについての情報を得て、参加者一人ひとりについての状態像をとらえること。
- ② 参加者一人ひとりについての状態像をふまえ、グループアプローチでの具体的目標を体系的に設定する指針を得ること。

\* ①、②の詳細は資料1参照

#### (3) グループアプローチの活動計画

##### ① 活動期間および活動時間

原則として、学校での各学期を一区切りに、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、……と区分し、一期ごとに終了の形をとり、毎週金曜日の午後1時30分から4時までを活動時間とした。

##### ② グループ編成

閉じられたグループとし、原則として、各期の途中からのグループへの参加は認めない。新たな参加者については、各期ごとに参加者を募り、担当者間で検討する。

##### ③ 活動場所

原則として、活動場所を固定する。子どもたちにとって、自分たちがいてもよいと感じることのできる空間を確保することや、製作活動などをするのに便利な場所であることを配慮する。

##### ④ 活動内容

参加することが容易で、人と人のかかわりが求められるような活動内容にする。

(例) ゲーム、運動、トランプ、調理実技、共同製作など

##### ⑤ 計画立案

活動計画の立案は、基本的にはグループアプローチの担当者が行っている。各期ごとに、活動の全体計画を立て、その計画をもとに各回ごとの具体的な活動計画を立て実践している。

\* ⑤のグループアプローチの全体計画、活動計画は資料2参照

##### ⑥ 記録

活動時間終了後に、その日の活動の振り返りを行う。方法としては、一人ひとりの子どもの感情表出の度合や感じたことを、振り返りカードに記入させ、そのチェックしたことなどを参考にしながら、子どもの感情の動きをとらえていきたいと思っている。

\*⑥の振り返りのチェックカードについては資料3参照

#### (4) 63年度の参加者と担当者

- 第Ⅵ期（5月13日～7月22日 合計9回）

参加者 男子2名、女子2名。 担当者 指導主事1名、主任研修員2名。

- 第Ⅶ期（9月9日～平成元年3月17日、合計18回）

参加者 男子4名、女子3名。 担当者 指導主事1名、主任研修員1名。

\* (4)の参加者の出席状況は資料4参照

## IV 経過

グループアプローチは昭和61年10月17日からスタートした。平成元年3月までに7期、合計57回の活動を実施している。各期ごとの期間、回数および参加者数は以下の通りである。

- 第Ⅰ期 昭和61年10月17日～昭和61年12月26日 合計 6回  
男子2名 女子8名 合計10名
- 第Ⅱ期 昭和62年2月6日～昭和62年3月17日 合計 4回  
男子2名 女子7名 合計9名（新たな参加者はない。だが、女子の1名が初回だけ参加したが後は参加できなくなってしまった）
- 第Ⅲ期 昭和62年5月1日～昭和62年7月17日 合計 7回  
男子5名 女子6名 合計11名（男子3名が新たに加わる。女子1名が登校するようになった）
- 第Ⅳ期 昭和62年9月18日～昭和62年12月25日 合計 8回  
男子6名、女子7名 合計13名（男子1名、女子3名が新たに加わる。女子2名が登校するようになった）
- 第Ⅴ期 昭和63年1月29日～昭和63年3月18日 合計 5回  
男子3名 女子4名 合計7名（新たな参加者はない。男子2名、女子1名が転居などにより参加できなくなった。男子1名、女子2名が登校するようになった）
- 第Ⅵ期 昭和63年5月13日～昭和63年7月22日 合計 9回  
男子2名 女子2名 合計4名（第Ⅰ期の初回だけ参加したが、2回目からは参加できなかった女子が1名加わった。男子1名、女子3名が中学校を卒業したことなどにより参加できなくなった）
- 第Ⅶ期 昭和63年9月9日～平成元年3月17日 合計 18回  
男子4名 女子3名 合計7名（途中から新たに男子2名、女子1名が加わった）

### 1. グループアプローチでの活動の流れ

\* T(1)、T(2)、T(3)はグループアプローチの担当者である。

5月13日（金）午後1時30分 第Ⅵ期はスタートした。

参加者は、第Ⅰ期から参加している、気が優しくて、体格のよい、中学３年生の男子のＴ男。第Ⅰ期の初回は参加したが、２回目からはグループに参加できなくなってしまった物静かな感じのＴＡ子。原級留置で現在は中学３年生である。第Ⅲ期から参加していて、明るい感じのする丸刈り頭の中学３年生男子のＯ男。そして、第Ⅳ期から参加している中学２年生の可愛らしい感じの女子ＨＵ子である。

第Ⅰ期の初回だけ参加したが、その時に無理をして自分を出しすぎてしまって、２回目から参加できなくなってしまったＴＡ子を除いた３人は、第Ⅳ期からの顔なじみである。そのためか、第Ⅵ期の初日であるにもかかわらず、全体の雰囲気緊張感はほとんど感じられない。

この日、最初にグループアプローチの活動場所である作業能力検査室に姿を見せたのはＴＡ子であった。待合室からＴ(1)がＴＡ子と一緒にこの部屋まで来た。１回だけグループアプローチに参加したが、２回目からは参加できなくなってしまったということもあって、どんな思いで席についたのか、Ｔ(2)としては気になった。ＴＡ子はとても落ち着いた、物静かな感じで座っている。初めて出会った人に対して、とても緊張すると聞いていたので、ＴＡ子と初めて出会うＴ(2)はＴＡ子の気持ちを硬くさせてしまいはしないかという思いが心をよぎった。

間もなくやってきたのはＯ男である。Ｏ男は相変わらずリラックスした感じで部屋に入って来た。「あれ、みんなは、まだ来ていないの」と言う。Ｏ男には、今回のグループアプローチの参加者が４人であることを事前に知らせておいた。Ｏ男は「今回は４人なんですよ。みんな、どうしているかな」と言い、「この間、Ｔ男やＩ男と川崎で会ったよ」と言う。全く屈託がない。

しばらくすると、Ｔ男が現れた。Ｏ男はＴ男の姿を認めるやいなや、待っていましたと言わんばかりに、「ドラクエⅢ、クリアしたかい」と聞いた。それに答えて、Ｔ男はあいさつもそこそこに、「いや、まだだよ。難しいところがあってさ。でも、今度の時までには、なんとかクリアしてやろうと思っているんだ」と言う。２人とも、とても楽しそうに、明るく、元気のよい声で話していた。

Ｏ男は第Ⅴ期まではいつも野球帽をかぶったまま活動に参加していた。ところが、今日はその野球帽をかぶっていない。

Ｏ男のすぐあとから、ＨＵ子が部屋に入って来た。表情にやや硬さが見られた。第Ⅴ期まで一緒に活動してきた仲間が、今回から参加しなくなったためだろうか。「こんにちは」とＴ(2)が声をかけると、ＨＵ子はあまり表情を変えずに「こんにちは」と、あいさつを返した。あたりを見回し、初めは広く空いている座席の方に向かいかけたが、ＴＡ子の姿を見つけると、歩み寄っていきＴＡ子の隣の椅子に腰掛けた。これで参加者の４人が全員集合した。

新年度になって、担当者も１名の交代があったので、新しく参加することになった担当者Ｔ(3)は自己紹介も兼ねて、自分が趣味とする手品を披露した。なかなかの評判であった。

手品が終わってからナンバーコールというゲームをやった。手拍子をしながら調子をつけ、自分の名前を言ってから、他の人の名前を呼ぶゲームである。リズムに乗るのがなかなか難しかった。(今までグループアプローチと一緒に活動してきたにもかかわらず、互いに異性の名前をしっかりと覚えていないことが分かり驚かされた。)

担当者の３人もゲームのメンバーとして一緒に参加した。



みんな間違えないようにやるのに必死であった。10分ほどこのゲームをやったところで、子どもたちの様子を見計らってT(2)が「そろそろ何か違うことをやってみるかい」と聞いた。すると、T男が「神経衰弱がいい」と答えた。トランプを全部裏返しにして、同じ数字のカードを見つけるゲームである。ゲームが始まり、しばらくすると、他の子どもはみな何組かのカードを取っているのに、順番の巡り合わせが悪いためか、TA子は1組も取れなかった。T(2)としては、TA子が1組でもいいから取ってくれるようにと祈るような気持ちであったが、TA子は1組も取れずにゲームは終わってしまった。TA子はどんな気持ちであったらうか。

「今度はどうしようか」とT(2)が聞くと、T男が「ページワンをやろう」と言う。「みんなどうかな」と聞くと、「いいよ」と返事があり、ページワンをやることになった。ページワンになると俄然、TA子の調子はよくなり、一番早く上がった。T(2)はほっとした。

3時30分になった。今日の活動を終え、担当者と子どもとの個人面談になった。

## 2. 子どもの活動中の表情と個人面談での様子

### (1) T男について

#### ① T男の活動中の表情

- 三番目に作業能力検査室に入って来た。いつも一番早く来るT男にしては珍しいが、他の人の来るのが早過ぎたようだ。
- 活動が始まる前は、O男とファミコンゲームのドラゴンクエストⅢについて、楽しそうに話していたが、活動が始まると、ぴたりと話をやめた。
- 「何をやろうか」ということに対しては自分の考えを言ってくれたが、それ以外はゲーム中はほとんど声を出さなかった。何となく、つまらなそうな表情に見えた。

#### ② T男の個人面談での様子

- 「グループは朝からあるより午後からあったほうが、電車がすいているからいい。(第Ⅴ期までは、グループアプローチは午前中に活動していた)混んでいる電車に乗るのはいやだから」と言う。
- 「次回のグループアプローチの活動日と歯医者に行く日が重なってしまった」と言う。そのことを言った後で「次回の作品作り用に、写真を持って来てもいいですか」と尋ねる。
- 何となく話をするのが、おっくうという感じがする。

### (2) TA子について

#### ① TA子の活動中の表情

- 第Ⅰ期に、初回だけグループアプローチに参加したが、その時、自分を出し過ぎてしまい、2回目からは参加できなくなってしまったTA子である。そのことを考えれば、動きに多少の硬さは見られたが、それは当然のことだと思う。多少の硬さは、むしろ、穏やか

で、無理をしていない様子という印象を受けた。

② T A子の個人面談での様子

- 「今日の午前中、センターに来る前、少しドキドキしました」と落ち着いた感じで話す。
- 「今は、友だちが欲しいと思って参加しているので、もっと自分から話しかけたりすればよかったのに、受け身だった」と言う。
- 「友だちがいっぱい欲しかったから、グループに参加できて、本当によかった」と嬉しそうに話す。

(3) O男について

① O男の活動中の表情

- 二番目に部屋に入って来た。自分で席を決めて座っていたが、T A子以外の他の人がなかなか現れないので、そわそわして、落ち着かないといった感じである。T男が姿を見せた時には、本当にほっとしたという感じであった。
- 全員が揃って、活動が始められると、その時、その時に感じたことをどンドン言葉にしていた。全くリラックスしているという感じである。
- 「今度5月の終わりに修学旅行があるんだけど、修学旅行に行きたいんだ」と明るく話す。

② O男の個人面談での様子

- 「T(3)のマジックなかなか面白かった。ただ、前はメンバーが沢山いたのに、今回は4人しかなくて、人数が少なかったのがちょっとつまらなかった」と話す。
- 「ナンバーコールの時、突然、T(1)が名字じゃなくて、名前の方を言い出したから誰のことかわからなくてあわてちゃった。他の人の名前がはっきり言ってわかっていなかったんだよね」と言う。
- 「自分でも今日はよくしゃべったって思う。すごく楽しかった。それに、なんだか自分自身がしゃべらないとつまらないって思うんだ」と話す。

(4) H U子について

① H U子の活動中の表情

- 最後に遅れて部屋に入って来た。表情にやや硬さが見られる。初めは広くあいている方の座席に向かいかけたが、T A子の姿に気がつく、歩み寄って行き、T A子の隣の椅子に腰をおろした。

- 初めのうちは黙っていたが、ゲームをやっているうちに、徐々に声を出すようになり、硬さも取れてきたようだ。

## ② HU子の個人面談での様子

- 「来る前は、どんな子が来るか。その子と友だちになれるか。ほんのちょっぴり心配だった。だから、部屋に入った時、先ず、男子の姿が目に入ったから、少し緊張した」と話す。
- 「TAさんと友だちになろうと思って、隣の席に座ったんだけど。もっと、TAさんに話しかければよかったのに」と言う。
- 「ゲームをやってみみんなの名前を覚えられてよかった。楽しかった」と言う。

## 3. グループアプローチで見られる子どもの状態像

### (1) T男について

第Ⅵ期の初めの頃は警戒心があったのか、好きなトランプをやっている時でも、浮かない表情をしていたT男だったが、回を重ねるごとに、表情はなごみ、明るさを取り戻してきた。

T男は卓球やトランプ遊びが好きで、特に、卓球には自信をもっているようだ。自信のもてることを楽しくやっていくうちに、徐々に自分を出せるようになってきた。

卓球やトランプ遊びをしながら、その時、その時に感じた自分の気持ちを、無理なく言葉にすることができるようになってきた。そうなるとともに、少しずつ主体的に動けるようになり、全体をリードしていくような発言や、全体を明るく盛り上げていくような発言をするようになって来た。

しかし、自分にとって未知な活動内容や、自信が持てない活動内容（例えば、知的な能力が要求されるものや、工作のようなものなど）の時には、今一つ元気が出てこない様子であった。失敗することや人に負けることをとても気にする。野外でバドミントンをしたことがあったが、個人面談の時に「バドミントンに負けちゃったから楽しくなかった。ビリになるのがすごくいやなんだ」と話した。

第Ⅶ期に入ってからは、竹とんぼが思うように作れなかったり、うまく飛ばせなかったりして、しょんぼりしていたこともあったが、そんな時でも「おれ、うまく削れないな。どうやったらうまく削れるの」、「おれ、竹とんぼうまく飛ばせられないや。どうやって飛ばしたらいいの。教えてよ」とO男に尋ねていた。その後、多少雑な出来上がりではあったが、竹とんぼを完成させた。それ以降は、活動内容にあまり左右されずに、全体をリードしていくような発言や、全体を明るく盛り上げていくような発言をするようになった。グループアプローチに参加しているみんなにとって中心的な存在になりつつある。

### (2) TA子について

「以前は、言おうか言わない方がいいか考えて、言わなくっちゃいけないと思って言ったりしたけれど、最近はそんなこと考えなくなった」と話した。この言葉通りに無理せず、ごく自然な感じ

で活動に参加しているように見える。絵を描くことが好きで、グループの男子に頼まれ、家で映画俳優のポートレートを描いてきたことがあったが、あまりにも実物そっくりに、しかも丁寧に描いてあったので、子どもたちは「まるで写真みたいだ」と称賛の声をあげた。それ以来、子どもたちは絵に関係することについてはT A子に伺いをたててから取り組んでいる。

野外でバドミントンをした時に「4人でダブルスをやった時、なぜかドキドキした。2人でやるから、いつ自分が打てばいいのかを心配していたからかもしれない。ちょっと緊張したけど割と自然に振る舞えた。今までだと、羽根を拾う時や打つ時に、周りの人が自分のことを見ていて『下手だ』と思っているんじゃないかと気にしたのに、今日はそんなふうに思わなかった」と話した。

第Ⅶ期に入ってからも、T A子の見せる物静かでゆったりとした表情は変わらない。卓球をしながらT男やO男がふざけあっている様子や、T A子に対して投げかける野次にも「にっこり」とほほは笑む。グループを落ち着いた、やわらかな雰囲気になっている。

### (3) O男について

「プラモデルを作る時などには、作る前にある程度完成した時のことを頭に思い浮かべながら作るんです。でも、作っていくうちに、だんだん思い描いていたのとずれてきてしまう。そうするともう作るのがいやになってしまうんです」と話した。作品は早く作り上げるが、やや雑な感じで、作品作りは苦手なようである。「せっかく、みんなが集まったのに、何もしゃべらないで黙々と活動していると、なんだか虚しくなってしまう」と話す。

O男はごく自然に、その時、その時に感じた自分の気持ちをそのまま表現する。「きれいだ」とT男の作品を見て率直に声をかけた。自信がなかったT男はその一言で生き返った。

第Ⅶ期に入ってからも、O男はみんなに気軽に声をかけている。新たに参加して、緊張気味のS男に対しても「名前何て言うんだっけ。むずかしい名前だったよね。どんなふうを書くの」と心配りをした。そのことがあってS男は他の人とも会話できるようになっていった。

### (4) H U子について

「前のグループアプローチのメンバーの時は、ギャグを言う人がいたから、よくワアワア言っていた。今は前みたいにワアワアできないけれど、自分では自然な感じがする。相手がおとなしい人だと、どんな話をしたらいいのかと思うけれど、あまり気にしないで話したいと思う」と話した。

「ぼくらの先生」というゲームの時、重苦しい沈黙が続いた。誰も一言も言わない時間が10分を過ぎた。12分をまわりかけたところで、やっとH U子が「意味わかんない」と言った。それをきっかけに徐々に発言が活発になり、このゲームの課題は解決された。

個人セラピーで自分の気持ちをどんどん表現できる。グループの時もさらっと自分の気持ちを話す。「工作って苦手なんだ。いつも、もっときれいに作りたいと思っているのに、うまく作れなくて」と話し、共同製作の時には、雑にやった男子たちに向かって「もっと丁寧にやってほしかったな」と素直に言えた。

第Ⅶ期に入って男子が以前に比べて女子に対して、親しみのある、からかうような声をかけてくるようになった。そのような声に対して笑顔で受け流している。自分がやりたいことなどについては気楽に表現している。

#### (5) SO子について

第Ⅶ期の途中4回目から7回目まで、グループアプローチに参加した。7回目に参加してしばらくしてから登校を開始した。SO子がグループに参加した最初の日が多摩川の河川敷でボール遊びをした。センターを出発する時にSO子の紹介を簡単にしただけだったが、すぐにTA子とHU子に話しかけていた。話し相手を求めているのだろうか。それとも、周りの人にとっても気をつかうところがあるとのことなので、そのあらわれなのかとも思った。SO子はTA子を慕っている様子で「お姉さん。お姉さん」と声をかけ、仲のよい姉妹という感じであった。TA子やHU子は男子に向かってボールを投げたり、男子を追いかけていたりしなかったが、SO子は担当者やT男にボールを投げってくるなど活発な動きを見せた。担当者としては無理をし過ぎてはいないか気にかかった。

以後の活動中も、言葉づかいや態度の礼儀正しさは変わらず気にかかった。

#### (6) HI男について

第Ⅶ期の途中8回目から活動に参加している。言葉に多少障害があるが、そのことを気にしている様子はほとんど見られない。グループでは卓球をよくやるが、卓球は苦手な様子でほとんどボールを打つことができない。みんなから「一緒にやろうよ」と言われて、内心は「いやだ」と思いながらも参加しているという感じである。みんなに会えることを楽しみにしており、それが多少いやだと思っても、卓球に参加している原動力になっているのではないかと思う。トランプではよく勝ち、勝った時には照れたように「にっこり」として喜ぶ。みんなに自分の方から話しかけるといことはほとんどしないが、声をかけられると明るく受け答える。

#### (7) S男について

第Ⅶ期の10回目から活動に参加している。グループに入ってから間もないこともあり、口数は少ない。個人セラピーでは比較的良好に話をするようになり、動きも活発だが、グループではまだ遠慮している様子である。

みんなで話し合っただけでカレーライスをつくることになった。今までグループで作ったことのあるホットケーキやお好み焼きやサンドイッチの話などをしながら楽しい雰囲気でも話しかけられた。カレーライスの材料をどうやって揃えるかということになって、米は各自が1合ずつ持ち寄ることになり、ジャガイモをT(1)が持って来ると申し出た。「みんなカレーライス作れるかな」とT(2)が聞くと、「ぼくはキャンプで作ったことがあります」と言った後「ぼくはいつも自転車です。後、後の材料の人参やカレー粉を持ってきてもいいよ」とS男が申し出た。そこで、みんなはS男にお願いすることにしたが、T(2)としてはS男が無理をし過ぎて引き受けたのではないかということが気になり「無理しちゃうんじゃないかな」と声をかけた。「そんなことはないですよ」とS男は答えた。当日になって、母親から「直前まで本人は行く気になっていたのに、気分が悪くなってグループを欠席しますが、材料は私がこれからお届けします」という電話があった。

## V 考察

今回報告したグループアプローチの全体を要約すると以下のようなことになる。

### ① 活動期間および活動時間

従来のように各学期ごとに期間を区切っていたのでは活動が細切れになってしまう。そこで、第Ⅶ期は2、3学期を通した活動にしたところ、まとまった活動を行うのに好都合となった。

活動時間は、第Ⅶ期以降毎週金曜日の午後としているが、それでよいと思う。

## ② グループ編成について

グループの構成員は10名以内が適当であろうと考えていたが、第Ⅵ期になり、参加者が4名に減少してしまった。子どもたちが今までの人数に慣れていたので、人数が少ないことに寂しさを感じていた。4名という人数では、活動中に自然に発生する無駄な時間が持てず、窮屈な思いで活動に参加している状態も見られた。もっと配慮すべきであったと思う。

そこで、第Ⅶ期は途中からの参加者も受け入れていくようにした。その結果、子どもたちは以前よりも自然な感じで振る舞っている様子が見られた。

## ③ 活動場所については従来通りでよいと思われる。

## ④ 今までの活動の成果を基盤にして、新たに取り入れた活動内容について

集団の中での対人関係上の課題を乗り越えていく体験を多くさせたいと考え、試みにトレーニング的色彩の濃い活動内容を取り入れてみた。一人ひとりが果たさなければならない役割がはっきりしていて、そこから逃れることが容易ではなく、他の人に代わってもらうことができないという点で、子どもにはかなりつらい体験になったようだ。人間関係のあり方やグループとしての成長という面から見てみると、時期尚早ではなかったかという思いもある。

## ⑤ 計画立案について

第Ⅵ期では、子どもたちが自主的に計画し、実践していけると期待されたが、男子2名、女子2名という少人数の男女構成であっただけでなく、グループをリードしていく役割を果たしていた子どもたちが卒業していったこともあり、集団としての機能が十分に働いていなかったと思われる。

## ⑥ 記録（子どもの心の動きをとらえるために）

第Ⅰ期から第Ⅴ期までは、主にグループアプローチが終わった翌週に、子どもの担当者との個人セラピーの中でグループアプローチでの子どもの思いなどを聴いてもらったり、フォローしてもらっていた。しかし、個人セラピーの中でいつもグループのことが語られるとは限らないし、子どもの担当者もグループに参加していないためフォローしにくいという面も見られた。そこで、第Ⅵ期はグループの活動終了後すぐに、グループアプローチの担当者と子どもとの個人面談を行い、子どものフォローをし、子どもの心の動きを時間を置かずとらえるよう工夫した。この個人面談の試みと、従来から行ってきた子ども自身による振り返りのチェック、担当者による活動の振り返りを通して、登校拒否の状態にある一人ひとりの子どもの心の成長にとって、グループアプローチがどのような役割が果たせるのか、どのようなかわりを持つことが援助につながるのかということが検討できた。しかし、第Ⅶ期に入ってから個人面談は行っていない。というのは、個人面談をすることによって子どもの生の声が聞けたり、担当者とのつながりが深められたりという、子どもの心の動きをとらえる上ではよい面も見られたが、担当者の方で子どもの話を聞きたいと思っても、子どもとしては積極的に話す気になれない場合も多く見られたからである。

その一方で、子どもたちが以前と比べ、活動時間中に参加している仲間や担当者に向かって、自分自身の感情や思いを率直に出せるようになってきたということもあり、子どものフォローをする

必要がある場合に限って個人面談をするだけで充分となったからである。

第Ⅵ期では、新たに個人面談の時間を設けたり、対人関係トレーニング的色彩の濃い活動内容を取り入れてみた。その結果、子どもとのつながりが深められ、個人面談で子どもが示していた雰囲気グループアプローチの活動時に徐々につながるようになり、さらに、トレーニング的課題にみんな協力して取り組み、解決できる喜びを味わわせられた。

しかし、改まった個人面談をしたり意図的にトレーニング活動を設定することは、主体的に動いていける力を子ども自らが育てていくという面から考えると、そこには多少の疑問が残る。

さて、グループアプローチの活動内容とグループに参加している子どもの動きという面から見てみると、どうであっただろうか。こつこつと地道にやりとげていかなければならない物作りのような時は、T A子やS 男やS O子やH I 男は集中して取り組めたが、T 男やO 男やH U子は苦手意識があるのか抵抗感があったようだ。卓球については、何と言っても一番積極的に取り組んだのはT 男であった。その反面、H I 男は参加はしていたが、「一緒にやろう」と誘ってくれる仲間の温かい気持ちをくんで付き合っていたのではないかと思う。H I 男以外の人には意欲的とまではいれないが結構楽しめる活動であったように思う。多少競い合う面もあることで健全な形で攻撃性が出せたり、ペアを替えることで他の人とかかわりがもてたりして面白味が増した。ドッジボールのような簡単なボール遊びもみんなで楽しめたようだ。男子は野球をやりたいが女子には不評であった。これは男女の力量の差が大き過ぎるという点からもやむを得ないことだと思う。また、知的能力が問われるような内容のゲームについては、O 男はあまり抵抗感を持たずに取り組んだが、他の人にとっては劣等意識が強く働いた様子で、表情が硬くなり、緊張感が高まったようだ。その反面、参加者全員が共通して楽しめたのは、トランプ遊びやウノという名前のカード遊びであった。子どもたちは気楽な雰囲気の中で、適度に競い合いながら、今ここでの自分の感情を素直に表現する喜びや人とかかわりあうことの喜びを体験していたのではないかと思う。

個人セラピーで受容され共感的に理解される体験を持つことのでき得た子どもが、個人セラピーでの体験を広げ、グループでの体験へと結びつけていくことができれば、自らを成長させていくことができるようになっていくと思われる。今回の実践を通して浮き彫りになってきたグループアプローチ実施上の配慮事項及び担当者像は次の通りである。

#### ① 配慮事項

- 自由でのびのびと活動できる雰囲気になるようにすること
- 自由に自分の思いを表現できる雰囲気になるようにすること
- 少しでも自分からやってみようと思える雰囲気になるようにすること

#### ② 担当者像

- 活動中に担当者が示す、その時、その時の姿勢は、子どもたちにとって一つのモデルになっている。そこで、担当者自身が、ごく自然に振る舞い、子どもたちに接していくこと。
- 子どもが示す、今ここでの気持ちや思いを大切に、言語化してやり、個人セラピーでの体験をグループでの体験へと広げていける手助けをしていくようにかかわること。

資料1 心理・性格特性の分析とグループアプローチでの具体的目標 (例)

① 心理・性格特性の分析

(14才, 男, 中3, S 60年9月インタビュー)

<p>家族構成 生育上の 問題点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>母は59年2月離婚(胎生期に父が事件を起こし, 警察に何度も行ったりし, 母体は不健康であった)</li> <li>姉: 高2, 妹: 小5。</li> </ul>
<p>個人治療 の方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>口数が少ない子供なので, 運動(卓球)をしながらサポートを深め, コミュニケーションを図っていく。体が大きく, 他のプレイを好まない。</li> <li>プレイ, 箱庭療法, カウンセリング。</li> </ul>
<p>本人の状 態像</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小6のはじめの頃, 杉の花粉症で通院し学校を休みがちであったために, 同じ班の人たちにいろいろいわれる言われて, 行きしぶりがはじまった。</li> <li>朝6時にトイレに入り, 鍵をかけ, トイレにとじこもってしまふ。出てくるように言うとき, 涙を流しながら出てくるので母親は「おかしい」と思った。</li> <li>本格的な登校拒否は中学1年のときからで, 始業式以来ほとんど登校していない。(担任が何回か迎えに来て, 5月に1週間登校した)</li> </ul>
<p>心理・ 性格特性</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自信がなく, 引っ込み思案で初対面の人とは話せない様子である。</li> <li>父親のイメージがあるのか, 大人の男性に対して警戒心をもっている。</li> <li>素直で, 優しい感じのする子供である。</li> </ul>

<p>治療過程 における 特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>センターに来所するたびに表情が明るくなっていくように思われる。</li> <li>卓球をしながらよくしゃべるようになった。</li> </ul>
<p>登校意欲 を示す状 態像</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>昼間に登校しようとする意欲は見られない。(現在は, 夕方6時すぎ, 生徒たちが下校した後, 登校して担任と会っているようである)</li> <li>2年生になって, 登校しようという意欲を少し示したが結局登校できなかつた。(母親は「長い目で見ていこう」という気持ちをもつようになり, 落着きを取り戻してきている)</li> <li>5月27日~29日に修学旅行が行われたが, 本人は参加できなかつた。グループの時, ぼつりと「修学旅行に行けばよかった」と言った。</li> </ul>
<p>考 察</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループの対人関係の中で, 人と触れ合うことの喜びを体験できるようになっていければよいと思う。</li> <li>グループの中で, ある程度自分が出せるようになってきた。グループの仲間たちを好んでいることである。</li> <li>リーダー的にやっつけていこうという様子も多少うかがえる。</li> </ul>

② グループアプローチでの具体的目標

- 自信を失っていて, 他人に対して強い警戒心を持っている。○男との結びつきを大切にしていきたい。自信を回復させ, 主体的に動けるようになっていきたい。



資料 2 グループアプローチの活動計画 (例)  
 第VI期全体計画案 (昭和63年5月13日～7月22日)

月日	主 題 名	ね ら い	主な活動内容
5/13	・オリエンテーション ・ゲーム	・第VI期のグループでどのような活動をする予定なのかを知らせる。 ・和やかな雰囲気の基本作りをする。	・担当者の自己紹介 ・メンバーの自己紹介 ・名札作り ・ゲーム：ナンバーコール ・その他
5/20	・ファンタジーボックス作り	・ファンタジーボックス作りを通して、自分を自由に表現する喜びやためらいの気持ちを体験する。	・ファンタジーボックス作り ・その他
5/27	・共同製作をしよう (プランをたてよう)	・他の人と共同で作品を作ることによって協力しながら人とかわる体験をする。	・テープカッター作りについでの話合い ・その他
6/3	・共同製作をしよう (実際に作ろう)	・他の人と共同で作品を作ることによって同じ目的を持って作業する時の人とのかわり方を体験しながら学ぶ。	

月日	主 題 名	ね ら い	主な活動内容
6/10	・二人で散歩 (協力ゲーム1)	・人に自分を委ねるとどんな気持ちか自分の心に湧くものかを体験を通して明らかにする。	・二人が組になる。 一方が目隠しをし、他方がいろいろな場所に案内する。 ・その他
6/17	・ぼくらの先生 (協力ゲーム2)	・与えられた課題を協力して解決することにより、グループ内の人間関係を深める。	・ゲーム：ぼくらの先生 ・その他
6/24	・運動を楽しもう	・全員が一つになって運動を楽しみ、相互の関係を深める。	・卓球や体を動かすゲーム ・その他
7/8	・外で過ごそう	・センター外に出て、ゆったりとした雰囲気の中で相互の関係を深める。	・生田緑地で過ごす (ボールを持って行く) ・その他
7/22	・終わりの会	・活動の振り返りを温かな人間関係の中で行い、人と人々が触れ合う喜びを味わう。	・ゲーム ・茶話会 ・その他

資料 2 第VI期 活動計画案 (例)

昭和63年度 グループアプローチ活動計画案(1) 昭和63年5月13日

主題	ねらい	留意点	活動場所
<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・ゲーム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループでの活動がどのようなものか知らせ、うちとけた雰囲気の中で参加できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心の触れ合いを大切に</li> <li>・新たな出発であることを確認する。</li> <li>・予め担当者が用意をしておくが、何をやるかの決定は子供たちに任せる。</li> </ul>	作業能力検査室
活動の流れ	活動の流れ	留意点	活動場所
<ol style="list-style-type: none"> <li>はじめに             <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・活動についてのオリエンテーション</li> <li>・自己紹介(担当者・子供たち)</li> <li>・名札作り</li> </ul> </li> <li>ゲーム             <ul style="list-style-type: none"> <li>・トランプ</li> <li>・ナンバークール</li> <li>・その他</li> </ul> </li> <li>振り返りカードを書く。</li> <li>次回の連絡</li> <li>個人面談</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>はじめに             <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・今日の活動についての説明</li> <li>・子供たちが持ってきた材料の確認をする。</li> <li>・第3プレイルームに移動し、会場を作る。</li> </ul> </li> <li>作り始める。             <ul style="list-style-type: none"> <li>作り終える。</li> </ul> </li> <li>振り返りカードを書く。</li> <li>次回の連絡</li> <li>個人面談</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由のびのびと製作に入れるようにする。</li> <li>・ファンタジボックス作りがしやすいように会場作りをする。</li> <li>・各自ルールを守って自由に作る。</li> </ul>	作業能力検査室
準備	準備		準備
	・振り返りカード、筆記用具、トランプ		・振り返りカード、ファンタジボックス用材料、筆記用具

昭和63年度 グループアプローチ活動計画案(2) 昭和63年5月20日

主題	ねらい	留意点	活動場所
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファンタジボックス作り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファンタジボックス作りを通して、自分を自由に表現する喜びやためらいの気持ちを経験する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由のびのびと製作に入れるようにする。</li> <li>・ファンタジボックス作りがしやすいように会場作りをする。</li> <li>・各自ルールを守って自由に作る。</li> </ul>	作業能力検査室
活動の流れ	活動の流れ	留意点	活動場所
<ol style="list-style-type: none"> <li>はじめに             <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・今日の活動についての説明</li> <li>・子供たちが持ってきた材料の確認をする。</li> <li>・第3プレイルームに移動し、会場を作る。</li> </ul> </li> <li>作り始める。             <ul style="list-style-type: none"> <li>作り終える。</li> </ul> </li> <li>振り返りカードを書く。</li> <li>次回の連絡</li> <li>個人面談</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>はじめに             <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・今日の活動についての説明</li> <li>・子供たちが持ってきた材料の確認をする。</li> <li>・第3プレイルームに移動し、会場を作る。</li> </ul> </li> <li>作り始める。             <ul style="list-style-type: none"> <li>作り終える。</li> </ul> </li> <li>振り返りカードを書く。</li> <li>次回の連絡</li> <li>個人面談</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由のびのびと製作に入れるようにする。</li> <li>・ファンタジボックス作りがしやすいように会場作りをする。</li> <li>・各自ルールを守って自由に作る。</li> </ul>	作業能力検査室
準備	準備		準備
	・振り返りカード、筆記用具、トランプ		・振り返りカード、ファンタジボックス用材料、筆記用具

資料3 グループ活動の振り返り(チェックリスト)(例)

グループでの活動を振り返って

昭和63年度 No.1 T男

	5/13	5/20	5/27	6/3	6/10	6/17	6/24	7/8	7/22	9/9	9/16	10/14	10/21	10/28	11/4	11/18	11/25
楽しかった どちらともいえない 楽しくなかった	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	活動の都合により実施せず	☆ ・ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・
全然緊張しなかった ときどき緊張した ずうっと緊張していた	・ ☆ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	・ ・ ☆	☆ ・ ・	☆ ・ ・
自然に振る舞えた ときどき気になった 皆の目が気になった	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・
よく喋った ときどき喋った 全然喋れなかった	・ ・ ☆	・ ☆ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・
よくきけた ときどききけなかった ほとんどきけなかった	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	・ ・ ☆	・ ☆ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	・ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・
良かった 良くも悪くもなかった あまり良もなかった	☆ ・ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	・ ☆ ・	☆ ・ ・	・ ・ ☆	・ ・ ☆	・ ☆ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・	・ ・ ・	・ ・ ☆	☆ ・ ・	☆ ・ ・	☆ ・ ・

資料4 参加者の参加状況（平成元年1月20日現在）

		第VI期							第VII期（活動は平成元年3月17日まで）													備 考			
		5月13日	5月20日	5月27日	6月3日	6月10日	6月17日	6月24日	7月8日	7月22日	9月9日	9月16日	10月14日	10月21日	10月28日	11月4日	11月18日	11月25日	12月2日	12月9日	12月16日	12月23日	1月20日		
																									○ …… 出席 ☆ … 登校開始 ● …… 欠席
1	K子	第V期までグループアプローチに参加した。アニメ専門学校に進みたいと思っている。																					中学卒業後自宅		
2	T男	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	中学3年生
3	T子	第III期の途中までグループアプローチに参加した。																					定時制高校在学		
4	N子	第V期までグループアプローチに参加した。アニメ専門学校に進みたいと思っている。																					中学卒業後自宅		
5	H子	第V期までグループアプローチに参加した。アニメ専門学校に進みたいと思っている。																					中学卒業後自宅		
6	M子	第III期の途中までグループアプローチに参加した。																					定時制高校在学		
7	H男	第IV期までグループアプローチに参加した。																					アルバイト中		
8	Y子	第IV期の途中までグループアプローチに参加した。																					全日制高校在学		
9	KO子	第II期の途中までグループアプローチに参加した。																					3年生通学		
10	TA子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	原級留置 中3
11	I男	第III期から第V期までグループアプローチに参加した。パン製造専門学校通学中																					専門学校通学中		
12	M男	第III期から第IV期までグループアプローチに参加した。																					転校後、登校		
13	O男	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	中学3年生
14	K男	第IV期から参加し、第IV期のみグループアプローチに参加した。																					大学検定予備校		
15	S子	第IV期から参加し、第IV期の途中までグループアプローチに参加した。																					仙台市に転居		
16	HA子	第IV期から参加し、1回だけグループアプローチに参加した。																					登校後中学卒業		
17	HU子	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	中学2年生
18	SO子																						中学1年生通学		
19	HI男																						中学3年生		
20	S男																						中学3年生		

## おわりに

完璧主義で、何をするにも自信がなく、何を言うのにも他の人の目が気になり、ぎこちなく、おとなしく、自分の思いを心の内に秘めながら生活していた子どもたち。

そんな子どもたちが、同じような悩みをもつ仲間とのかかわりを通じていくうちに、私たちの前で見せる様子や話題に変化が見られるようになってきた。

その瞬間、瞬間に自分が感じたことを、率直に言葉で表わすことができるようになってきた。それは、時には仲間への称賛の言葉であり、時にはひやかしの声でもある。また、時には攻撃的な声であり、その反撃の言葉でもある。

今までは避けていた学校のこと、自分の考えていること、自分が今やりたいことなどについて、みんなの前で話されるようになってきた。

このような子どもたちの様子を見てみると、同じような悩みを持つ仲間との交流体験を通し、子どもたちは徐々に心を開き、自信を回復してきているのだと思う。グループアプローチでの体験が子どもたちの心の成長にとって、有効に作用しているのではないかという手応えを感じている。

しかし、グループアプローチが一人ひとりの子どもにとって、どのような意味があるのか未だに十分に把握するには至っていない。どのような方法がよいのか、さらに検討を加えていかなければならないと思う。

最後に、このグループアプローチを進めるにあたって、ご指導、ご助言下さいました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

### ・引用文献

安谷屋健他「登校拒否に対するグループアプローチ」昭和62年度川崎市総合教育センター研究紀要、川崎市総合教育センター 1988年 179P 168P

真仁田昭他「登校拒否児に対する治療の構造論的展開」筑波大学学校教育部教育相談研究分野教育相談研究第19集 1981年 1P

### ・参考文献

小泉英二編著「登校拒否 その心理と治療」学事出版 1982年

内山喜久雄編「登校拒否」金剛出版 昭和61年

田中熊次郎著「グループセラピー」日本文化科学社 1987年

カール・ロジャーズ著「エンカウンター・グループ」創元社 昭和63年

東山紘久「母親と教師がなおす 登校拒否」創元社 昭和62年

国分康孝著「エンカウンター」誠信書房 昭和61年

国分康孝著「カウンセリングマインド」誠信書房 1981年

縫部義憲著「教師と生徒の人間づくり」瀝々社 昭和61年

GWT研究会著「グループワーク・トレーニング」遊戯社 昭和62年

### ・指導・助言者

横浜国立大学助教授 岡田 守弘 先生